

平成25年度「子どもをはぐくむ地域実践プロジェクト」
第1回地域家庭教育推進県中ブロック会議 会議録

■ 日時：平成25年 6月 7日（金） 13：30～16：30

■ 場所：郡山市労働福祉会館（第2会議室）

■ 参加者：

滝田 良子 氏（郡山女子大学短期大学部幼児教育学科准教授）
瀧田 勉 氏（郡山市PTA連合会会長）※欠席
村上 和行 氏（福島県PTA連合会副会長）※欠席
三本木 正善 氏（郡山市子ども会育成会連絡協議会会長）
渡辺 征子 氏（郡山市スポーツ少年団副理事長）
佐久間作代子 氏（石川町主任児童委員）
塩田 富子 氏（家庭教育支援県中協議会会長）
内山 美佐子 氏（放課後子ども教室活動「あすなろ教室」コーディネーター）
森 勝雄 氏（須賀川市中央公民館館長）
石黒 真知子 氏（郡山警察署生活安全課専門少年警察補導員）
宇佐見 洋子 氏（家庭教育インストラクター）
針生 春子 氏（家庭教育インストラクター）
渡辺 さゆり 氏（郡山市民代表）
鈴木 俊明 （県中教育事務所総務次長兼総務社会教育課長）
吾妻 敦 （同 総務社会教育課主任社会教育主事）
松原 強 （同 総務社会教育課社会教育主事）
緑川 喜久 （同 総務社会教育課社会教育主事）
小檜山 健 （同 学校教育課指導主事）



計：16名（2名欠席）

■ 内容：

進行：緑川

1 開会

- ・ あいさつ（鈴木） ※別の会合から到着次第行う。

2 昨年度のブロック会議の概要確認並びに本日の会議の持ち方について（吾妻）

本会議も3年目を迎えた。この会議では、家庭教育の現状を把握し、課題を整理した上で各団体・各家庭等で実践につなげていくことができるようにしていきたい。

今までの会議等で課題になったことは、要項の「キーワード」として示されており、2ページに「家庭」「地域」「東日本大震災」の3つにまとめられている。昨年度、実際に活動としてこの会議で取り組んだのが、昨年12月のワールドカフェ方式で120名の参加者の中で行ったブロックセミナーであった。

ブロックセミナーでは、「考えよう、地域の力・家庭の力・学校の力」をテーマとして、特に地域・家庭・学校の力をさらに高めるために、あるいは維持するために私たちにできること、すべきことは何なのか、幅広い世代の方がグループを変えながら話し合いを行った。話し合いの中では、今できるということで「地域の行事に積極的に参加しよう。」「思いやりやコミュニケーションを大切に」などの意見が出され、まとめられた。

今年は、「コミュニケーションを大切に」をキーワードにブロック会義やブロックセミナー等を進めて行くこととした。ご理解いただき、その辺を意識しながら会議に臨んでいただきたい。なお、最終年度であるので実践化につなげていきたいと考えている。特別なことではなく参加されている各団体にブロック会議やブロックセミナーの内容を持ち帰り実践に生かして欲しい。2回目の会議では、各団体で実践に移した内容等を発表していただき、まとめとしていきたい。

3 自己紹介並びに実践事例の発表（司会：滝田良子アドバイザー）

- ・ 新しく委員になられた方もいるため簡単な自己紹介をする。
- ・ 各団体の取り組み内容等について発表する。

【推進委員より自己紹介・活動紹介】

滝田 * 県中地区ブロック会議アドバイザー

この会議も3年目となった。2年目には、ワールドカフェ方式でのセミナー開催を提案したところ、皆さんが前向きに取り組んでくださった。セミナーでは参加者一人ひとりの思いや意見が次々と出され、参加者の持っている力を再発見することができた。私自身このセミナーから何を学んだか、何が発信できたのか振り返ってみると、学生のボランティアに対する意識を変えることに取り組んだことがあげられる。震災後、学生がボランティアに取り組んできたのだが、そこにはやらされている感じがあった。また、服装や話し方等をみても自分というものが感じられなかった。そこで、ボランティアのあり方を自分たちで相手を見つけ、計画させるようにした。自分たちで計画し体験した経験等が生かされ、記録に書く文章等に自分らしさが出てきた。人と主体的に対話することが重要なのだと感じた。自分で計画して進めたセミナーではあったが、多くのことを学ぶことができた。今年は、昨年のを土台としてつなげていければと思う。

森 * 公民館活動を通して

この会議の内容でもある家庭教育・子ども教育として食育に興味を持って掘り下げて取り組んでいる。今年度も前期・後期に分けて事業を展開しているが反響が大きく定員を大きく上回る応募があった。多くの子が参加できるよう工夫して実施していきたい。

内山 * 放課後子ども教室活動を通して

須賀川市立長沼東小学校で子ども教室のコーディネーターをしている。昨年度のワールドカフェではお手伝いをさせていただき、いろいろな年代の方と話すことができた。こんな方法もあるのだと感じ、大変楽しい思いをすることができた。

宇佐見 * ボランティア・家庭教育インストラクターとして

家庭教育支援インストラクター・CAPスペシャリスト・日本赤十字社救急指導員ボランティアとして活動しており、今回はCAPという子どもへの暴力防止プログラムの実践家としての視点からの立場で話をしたい。CAPのプログラムは、子どもたち自身が自由意志を持って暴力から自分を守るための知識や技能・スキルを持つことを願って、発達段階に応じたワークショップ形式のプログラム。そのプログラムは、教職員・地域の人たち等にも提供している。また、行政からの支援を受けて学校の授業でも行っている。

家庭教育は、社会と密接な関わりがあり、社会の子ども・地域の子どもの支援としていくことは大切なことである。地域で暮らす弱い立場の人たちが苦しんでいくことがないよう、特に子どもや女性のために地域で取り組んでいきたいと思っている。

石黒 * 少年警察補導員として

少年警察補導員の業務としては、少年の非行防止と健全育成活動に関するもので、触法少年の調査面接、要保護少年・不良行為少年の対応、街頭補導、少年相談、立ち直り支援、学校・地域ボランティア・関係機関との連携活動等を行っています。

渡辺さ * 市民として

1年目は郡山市PTA連合会の代表として、2年目は一市民として何ができるか自分なりに模索してきた。自分としては、これまで広汎性発達障がいへの理解と支援に取り組んできた。その中でも通常の学級や通級・特別支援学級の子どもたちへの理解とそのお母さん達への支援につながればと考えてきた。お子さんに障がいがあってもがんばっている先輩お母さん方と若いお母さん方の情報交換の場を設け、直接子ども達へではないがお母さんが元気になれるような環境作りができればと思っている。

針 生 *市民として

震災により大きく状況が変わってきた。今までいろいろな方から教えていただいたことを地域に返そうと、3年ほど前に公民館を拠点として小学生支援を目的に「にこにこサポーター」を立ち上げた。いろいろな方に教えていただいたり、学んだりしながら地域のお手伝いができるよう20名ほどで活動している。

佐久間 *主任児童委員として

石川町には主任児童委員が3名おり、子どもを中心に引きこもり等の支援をしている。家庭へ直接入っていくことは難しいので、学校訪問をしながら得た情報を役所へ伝えるなど、支援のためのつなぎやお手伝いをするのが役目と思っている。また、そのような家庭に対しては、大げさに騒がず、関心を持ちながら見守るなどして関わるようにしている。

保育所入所前の子を持つ母親たちの子育てに役立つことができるよう、月に1度程度、入所前の子どもたちが母親と一緒に保育所に集まる機会をとらえて支援を行っている。今年は、最初の集まりの時に主任児童員の立場や役割をはっきり伝えたとこ、母親たちの理解が深まり、安心感と親しみを持ってもらうことができた。CMの大切さを感じた。

塩 田 *ボランティア・家庭教育インストラクターとして

県のさざなみの会より平成23年度に独立し、家庭教育支援県中協議会として活動をしている。(年1回の総会と2回の研修会) 昨年は、県中ブロックセミナーに全会員で参加しての研修と田村地区の幼稚園での家庭教育学級の講師を依頼され役員の一人が対応した。郡山・須賀川・石川・田村の各地区に分かれて独自の活動も行っている。行政との連携や活動の場が少ないなどの課題もある。石川地区としては、今年も子育てサポートチーム養成研修を受講し、スキルアップを図りたい。研修を受けることでよい話を聞くことができ、家庭教育学級で生かすことができた。

渡辺征 *スポーツ少年団活動を通して

スポーツ少年団では、スポーツ活動だけでなく団員にジュニアリーダー資格など様々な資格を取らせたり、大人の指導者への研修などを行ったりもしている。

スポーツ少年団活動をしていて問題となっているのが、母親など大人の姿勢である。指導者研修会・母集団養成講習会に参加しやすいよう子どもたちの発表会を兼ねながら行うのだが、参加者は少ない。また、子どもたちを活動の場まで送ってそのまますぐに帰ってしまったり、送迎の大変さから子どもに活動を遠慮させてしまったりする親も見られる。子どもの成長を一緒に見守る親であって欲しいと願っている。

スポーツ少年団活動の一環として学校に協力することも可能であるがあまり知られていないことや学校に入りにくいこともあり、協力する機会は少ない。機会を捉えてPRしていきたい。

スポーツ少年団活動以外に、地域で社会福祉子育てサポートとして小さいお子さんを抱えていて友人の少ない母親への支援も行っている。

家庭教育が一番大切であると日頃から感じている。

三本木 *子ども会育成活動を通して

昨年度の子ども会育成協議会では、大人も子どもも混じっての地区対抗ドッジボール大会を行った。日常の活動がしっかりしている地域が勝ち残ったように思う。また、2月には県中ブロックセミナーで経験したワールドカフェ方式で子ども会議を行った。あまりうまくいかなかったが、今年もう一度、昨年度の反省を踏まえて取り組むこととした。今年はずいぶん先生にも入っていただけるよう調整していきたい。今年のメインは、東京スカイツリーなどに行く「子ども元気ツアー」となる。放射能の心配のないところでのびのびと遊んできたいと思っている。

郡山の子ども会は16支部あり、湖南や喜久田に負けないよう様々な活動に取り組み、子どもたちを元気にしていきたい。

【事務局自己紹介】

【 質 疑 】

渡辺さ

3年前は、放射線の影響からか公民館での料理講座への受講生が少なかったと聞いていた。今年は、食育講座への反響が大きく申し込みが多数あるということだが、何か公民館として工夫されたことはあるのか。

森

3年前は、震災直後であり、親が不確かな情報を信じ、放射能ということだけで子どもの参加意欲の芽を摘み取ってしまっていた。子どもの学びの機会を奪ってはいけないと思い、たとえ少人数であっても実施しようということで教室を開催した。

親の意識も少しずつ変化し、去年は、教室の外から活動の様子を見ることを認めたところ、子どもの会話や姿から親として自己を反省するきっかけとなったようだ。親が台所に立つことによって、たとえ包丁の使い方が上手でなくとも子どもたちは親の姿から学んでいく。小学生でも包丁を使わなくてはならない家庭状況では、子どもは自然と包丁の使い方が上手になってくる。市民の森での野外調理で、マッチが使えない子、洗剤で米を洗う子などがいる。これらは、親が子どもの育つ芽を取り上げているからであり、環境がそうさせているのだと思う。

だから、食育として、公民館が家庭でできないことを意識して取り組むべきだと思っている。

また、震災以降体力が落ちているのは、バブル以降の食の変化（レトルト食品であったり、煙のでない食べ物であったり）・マイナスの食育が長年積み重ねられ、今、子どもたちに表れてきているのだと思う。

食育というのは非常に大切なことであり、体験して学ぶことができる。子どもに親がたとえうまくいかなくとも見せることでそれが学びとなる。IHクッキングであるとかフードプロセッサであるとか便利な物がたくさんあるが、包丁を使うなどの手作業で行うことが大切である。デジタル化よりもアナログ化を意識して取り組んでいきたい。

塩 田

食育の講座は講師が教えているのだと思うが、グループが多くなると講師の人数も大変ではないか。

森

講師は1人で、そこに食生活改善推進委員にお手伝いで入ってもらっている。

塩 田

家庭教育学級では、「なぜ文部科学省で『早寝・早起き・朝ご飯』について言わなくてはならないのか。家庭で親がやるべきことではないですか。」と話している。今はなんでも先生に頼めばいいということになってきているのではないか。

森

なんでも学校のせいにするのはどうかと思う。

塩 田

三世代同居が大事ではないか。

森

三世代はどうかと思うが、お年寄りが家庭教育、しつけの一番の先生である。

塩 田

孫にやりたがっていた料理の手伝いをやらせると、いつも以上によく食べる。作る過程に関わったことでよりおいしく感じるのだと思う。

渡辺征

それが食育でもあると思う。

滝 田

森委員よりあった話は事実であり、幼児教育の中でも子どものままごとの道具からまな板が消えてしまっていることを以前話したことがあった。子どもの生活には家庭の状況が反映されているということである。

食育については、それぞれの委員がそれぞれの立場でできることに取り組んでおられると思う。森委員は、今そこに一生懸命に取り組んでおられる。

森

今の運動会は、ピザの宅配であったり、すしの出前をとったり、オードブルを買ってきたりする時代である。

内 山

お弁当の日にコンビニ弁当をそのまま持ってきている子もいる。

森

コンビニ弁当も昔は、家で入れ替えていたが、今はそのまま持ってきており、机に同じコンビニの袋が並んでいる。入れ替えをする時間さえもないのかもしれない。親の愛情も感じるできないなあと思う。

- 塩田 それは、中学校ではなく小学校なのか。
- 森 中学校でもあること。もしかすると中学校の方が多いのかもしれない。
- 内山 小学校では、朝ご飯を食べてこないの、先生が学校でその子に食べさせていたという事例もある。
- 滝田 今回の状況を補導員という立場からお話をいただきたい。
- 石黒 話題になっていた食生活については、関係する子どもたちから話を聞くと、それぞれの家庭で様々な状況がある。子どもを取り巻く社会環境も変わってきている。核家族化が進み、日常生活のパターンも昔とは変化し、食生活においてもそうである。問題傾向を持つ子どもは、食の部分でも何らかの問題があるように思える。
- 滝田 補導される子どもたちの中には、いじめを受けた子や家庭に安らげる場がないなど様々な事例を見てきたと思う。
- 石黒 母親から虐待を受けていた児童の事例では、その母親は、子どもの頃から虐待を受けて育っていたようです。そのような母親が我が子にも手を出すという、暴力の連鎖が起きてしまった。問題行動を持つ子どもは、どちらかという家庭の問題等を抱えていることが多いように思える。そんな子どもに対して、温かい言葉をかけてやるのが大事であり、その子の心に何か響くものとなれば嬉しいし、立ち直りのきっかけになってくれればよいと思っている。
- 滝田 家庭が家庭としての機能を果たせておらず安らげる場ではないため、様々な問題が起きているのかもしれない。
- 針生 問題を抱える家庭が地域の中にあつたときにどう関わっていくことができるのか考えていきたい。声をかけられることで救われることもあると思う。隣近所や学校と連携しながら、地域の中でいつでも支え合えるような雰囲気がたくさんあればと思っている。自分自身でできることは小さいかもしれないが取り組んでいきたい。
- 滝田 地域や家庭への支援については、渡辺征子委員がたくさん経験しておられると思うので、お話しいたきたい。
- 渡辺征 困っているような家庭に手助けしてあげたい気持ちはあるのだが、そういう家庭は拒絶することが多い。余計なお世話にならないよう、距離をおきながらも決して目を離さず、少しずつ関わりながら本人が心を開いたときに声をかけるようにしている。難しいところである。
- スポーツ少年団のなかでは、父親はあまり言わないのだが、母親の中には指導者を非難する人もいる。指導者が本当にひどいときは、母親みんなで集まって話し合い改善を求めていくようにすることが大切であると話している。

— 休 憩 —

4 問題提起

○ 学力面から 県中教育事務所 小檜山指導主事

資料：「ふくしまの未来を担う子どもたちのために～「つなぐ教育」で確かな学力を～」

「平成24年度『福島県学力調査』結果について」より

- ・ 全国と比較し、改善傾向にある領域や視点がある一方で、課題となっている部分もある。
- ・ 意識調査の結果から生活習慣と学力の相関関係が見られる。また、夢や希望をもっている子ども等は比較的学力が高くなっている。
- ・ 今年度の全国学力・学習状況調査では、保護者に対する調査を実施し、子どもの教育に対する考え方等との関連についての分析を進めていく。
- ・ 福島県教育委員会では、ふくしまの未来を担う子どもたちを育成するために「福島県学力向上改善会議」を開き、3回にわたる会議を経てまとめられた提言を受けて、具体的な取組につなげていくことができるようリーフレットを作成した。福島の復興へ取り組もうとする子ども

たちへ「あこがれ」や「やり抜く意思」等を育むことができるよう、家庭、教職員、社会人がつながり合い、協力し合って取り組むことが大切である。それぞれの立場から支援や見守りをお願いしたい。

○ 健康面から 県中教育事務所 緑川社会教育主事

資料：「本県の子どもの現状と健康課題」「平成24年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果の概要」より

- ・ 本県の子どもたちの体と心の健康についての課題は「肥満」と「う歯」である。
- ・ 肥満について
16歳の女子以外は、男女ともすべての年齢で全国を上回っている。出現率を見ると24年度は14%であり、増加傾向にあるというわけではないが肥満傾向の児童は多い。
背景として考えられることの一つには、震災後の屋外活動の制限等による運動量の減少とともに、体力向上に対する関心が家庭でも低下しており、運動の場と機会だけでなく、日常生活での身体活動量の減少も影響していると思われる。
もう一つの原因としては、生活習慣や自分自身の体や健康に対する意識が考えられる。朝食摂取率やテレビの視聴時間などは、全国よりも比較的良好な状況ではあるが、毎朝の朝食摂取率をあげること、睡眠時間を確保することは、引き続き今後の課題。
- ・ う歯について
調査したすべての年齢で全国を上回っているが、年々減少傾向にはある。家庭や様々な機関の取り組みの成果。今後も力を入れて取り組む必要がある。
- ・ 健康課題解消に向けて
平成24年度より「ヘルシースマイル事業」として学校教育の中で地域や関係機関の専門家からの指導・助言をうけながら、取り組んでいる。それぞれの立場でもご協力いただきたい。

5 意見交換・協議（司会：滝田良子アドバイザー）

問題提起から、それぞれの立場で子どもたちの生活習慣向上のための取り組みや昨年度のセミナーやブロック会議後の取り組みなどを踏まえフリートークをしてもらう。

滝田 問題提起を受けて各委員からそれぞれの所属団体の活動をもとにご意見があれば出していただきたい。

三本木 これほど肥満が多いことに驚いている。昨年のドッジボール大会を振り返ってみると瞬発力・反応の遅い子が見られた。そのような子たちの運動能力をどのように高めていったらよいのだろうかと思っている。

今、趣味のスポーツ人口が増加し、競技スポーツの人口は減少していると聞いたことがあるが、趣味（レクリエーション）スポーツと競技スポーツの違いはなんなのだろうか。

渡辺征 競技スポーツとは、主にオリンピックまでつながるようなスポーツを言い、その他の高齢者もできるようなものをレクリエーションスポーツと言う。

少年団へは、競技スポーツ的な取り組みではなく、少年団の意義である青少年の健全育成・心の育成を踏まえて、スポーツ嫌いをうまないよう訴えている。しかし、勝利至上主義的な考え方の指導者もあり、暴言・暴力などの姿や団員にやりたくないと言ってしまう指導者もかなり見られる。

スポーツ少年団では、独自のスポーツテストを行っているが、結果を見ると標準以下の子や運動能力のバランスの悪い子もけっこうおり、改善のための指導も行うようにしている。しかし、指導者の意識が低く勝つことを重視し、大切な体づくりを軽く見がちである。指導者の資質向上の研修会を行っているのだが、さらに取り組んで行く必要がある。

三本木 孫のスポ少を見ていて感じたことだが、自分の指導を棚に上げて子どもを怒鳴っている指導者がいた。大人として自分の指導を考える必要がある。強くなることも大切だとは思うがいかがなものだろうか。

渡辺 征

そのような指導者は、研修会を行っても参加しない。

滝 田

問題提起の中で、学力面ではコミュニケーション、健康面では肥満が問題となっていたが、各団体で改善に向けてそれぞれ取り組んでおられることと思うので、お話しいただきたい。

森

肥満の現状から食育の重要性を感じる。親のいたらなさを非難するのではなくしっかりと食について教えていく必要がある。また、家庭においては、先ほどのスポ少のお話にもあったように子どもをほめて育てていくことが大切であると思う。プラス思考で褒めて育てられた子どもたちが、やがて大人になり、よりよい家庭を築くことができるのだと思う。また、褒められた経験が自信となり勉強にもいい意味で生かされるのではないかと思う。子どもがよりよく成長できるようにするのは大人の責任である。

滝 田

森委員からは、手段としては調理、本質的には自信を育てていく。それが学習にもつながるのではないかという話があった。今、「ほめ達」という研修がある。私たちは何気なく褒めていたのだが、その研修を受けて「達人」となるような時代となっている。

内 山

放課後子ども教室には30名程度が週3回（月・水・金）通ってきている。そんな子たちを見ていて感じたことは、自分から取り組める子は、優秀であるし、正しい筆順で、丁寧な文字を書く子は自分で辞書を引いて自分で学習できる。遊びを優先し最後までやる子、友達に教えながらやる子、学年が上がる度に何かにつまずく、集中できない子など様々な子がいる。どうせできないからと思わせないように、意欲が出るようにと心がけながら、食生活についても出しゃばりすぎないように気をつけながら子どもや家の人に声をかけるようにしている。我が子のようにまではいかないが、愛情を持って自分自身の子育ての中でできなかつたことができればと思いながら接している。

滝 田

子ども教室では、場を設定してあげ、環境作りをしてあげ、習慣作りをしてあげることに努力されている。

宇佐見

肯定的にとらえること、褒めてあげることは大切である。子どもたちは、「何が良くて」「何が悪くて」ということの体験が少ない。良い体験がなければ“安心して”“自信を持って”“自由を選択していくこと”ができなくなってしまう。子どもたちが正しい知識を身につけ行動できるようにするために、まわりの大人がどう取り組んでいくのが大切である。そのために私たちは、各地区で関係機関と連携しながらワークショップを開催している。私たちの活動は、「何が子どもたちに力を与えるツールとなるのか」というところの役割を担っている。

滝 田

子ども自身が選択できる・嫌と言えることが、自分の身を守ることができるという意味でとても重要なことであり、そのために自信をつけていく必要がある。

石 黒

怠惰な生活や荒んだ生活は、学力や健康面で悪い影響があるとともにいろいろな面で問題を起こしやすい環境にあるのだと思う。このような子どもたちは、素直に大人を受け入れられないし、大人を信用できない子たちである。しかし、本心では誰よりも愛情をかけてもらいたい、認めてほしいと願っている。声をかけ、愛情という水をかけ、ほめて、認めてやることが子どもの健やかな成長には必要なのだと思う。

滝 田

自己肯定できない、自己評価も低いため、認められたいとの思いから逆に問題行動に走ってしまうこともあると思う。日常の子どもたちへの地道な励ましなどが大事なのだと思う。

佐久間

私たち主任児童員の活動は直接学力につながるものではないが、引きこもりの子どもたちが学校へ行くことができるよう今後も活動していきたい。

鈴 木

自分の子育てを振り返ってみると我が家では小学校の入学式で校長先生の話にあった「早寝・早起き・よい子の生活」をずっと実践してきたように思う。今、夜更かししている子が多いこと、朝ご飯を食べないで学校へ行く子が多いことなど家庭の教育力が低くなっているのではないかと思う。子育ては、学校・家庭・社会の3つの教育がうまくバランスがとれていないと効果が上がらない。バランスがとれていることによって問題行動をと

る子も少なくなるのではと思う。

渡辺さ 森委員よりの洗剤でお米を洗うは、とうとう福島にも来たのかという感じで聞かせていただいた。

私がPTAに関わり始めた10年前は、「今の時代、親を教育してもだめなので、子どもを教育しよう。」という風潮があった。しかし、お米の話を考えてみても今の若い親に目を向けていかないと子どもが育っていかないように思う。私も所属している交通安全母の会には若いお母さんも参加しているので、その活動を通して家庭教育にふれていければと思っている。親が育てば、学習・健康面の改善にもつながっていくのではないかなと思う。

滝田 一時期、無関心の親切という時代があったが、それでは子どもが育っていかない。何らかの形で関わっていくことが大切である。

針生 住んでいる地域は、商店もなく、企業や工場などの職場もない。悪いことに誘われたり、怖い思いをしたりすることもなく子どもたちが育つ環境ではあるが、そのような経験をすることもなく大きくなって大丈夫なのかとも思う。自分のできる範囲の中で小さい子も小学生・中学生もお年寄りまで声をかけ、お世話をやいていこうと思っている。

滝田 あの人に相談すると心が癒されるとか、気軽に相談してみようとか、安心して話せることが地域の中で大きな存在となってくる。今後も引き続き取り組んでいていただきたい。

塩田 生活習慣がしっかりしている子の学力が高いという話であったが、これは家庭の問題であり、一番大切なことであると思う。

家庭教育学級の中でよく話すことなのだが、私は夫に「絶対勉強しろって言わないで子育てしよう。」と約束させられ、子育てしてきた。「やったの。」という確認はしてきたが、後で大人になった我が子に感謝された。孫は地域の中で暗くなるまで遊んでいる。地域とのつながりができて良いと思っている。大事なことは、「勉強しろ。勉強しろ。」とうるさく言うことよりも基本的な生活習慣を親がいっしょにしっかりと身につけさせていくことだと思う。

滝田 生活習慣の自立が学習につながっていく。そこを親がいかにさせていくかが大変なのである。「勉強しろ。」という代わりに確認をしたことが大切であり、遊んで、たくさん会話をして帰ってきた子に「どうだったの。」と声をかけることが、何があったのかを頭の中で整理をして伝えることにつながるので、学習の基礎となってくると思う。

これまでの子育て経験を伝えたいことが伝わるように補足しながら、いろいろな方に伝えていただきたい。

渡辺征 6年生の孫も勉強をしなければならないことは頭に入っているようで、母親の代わりに学校に迎えに行ったときには、「今日は勉強しなさいって言わないでね。」と言っていたことがあった。

運動をしている子としていない子とでは少し違うのかなと思う。スポ少に来る場合は、必ずやるべきとはやるように指導している。また、体の小さい子や体力の無い子もお食事の大切さなどについても教えながら活動している。健康面についてはすべての面で本当に大切なことだと思っている。

三本木 若い親をどうやって教育していけばよいのだろうか。何か良い方法はないのだろうか。

渡辺さ 若い親に接していく方法は、郡山市であれば家庭教育学習会やPTAでの委員会活動、地域での集まりでできればと思っている。

三本木 子育てに関心の低い親ほどそういう集まりに出てこないと聞いている。そこをどうするのか問題だと思う。

渡辺さ PTAの若いお母さん達の中で面倒見の良い人もいる。そのような人に積極的に関わってもらえるように働きかけながら、若いお母さん同士でできるように環境作りをしていきたいと思っている。

滝田 各委員の日頃の地域での取り組み・がんばっている姿に敬服です。

6 総括（滝田良子アドバイザーより）

子育て世代の生活基盤をきちんとしていくことが重要である。そうすることによって安心した家庭を築くことができ、子どもの気持ちも安定し、学習意欲へもつながっていく。今、その基盤が盤石になっているのか問われているような気がする。

各分野で生活習慣を見直すことやあいさつをすることなどにそれぞれが取り組んでいってはどうだろうか。そうすることで、相手の顔が見えコミュニケーションをとっていくことができるようになるのではないだろうか。

学力の向上は、その子の持てる力を最大限に発揮できるようにしていくことであり、それが確かな学力の向上であると思う。

今の時代、夢よりもお金に直結するような育て方をしているように感じられる。夢や希望が持てるような大人のあり方・育て方をしていく必要がある。私たち自身が手本となって取り組んでいくことが大切であり、そういう子育ての流れにしていくようにすることがこの委員会の役割でもあると思う。それぞれの立場で何ができるか考え、できることに取り組んでいただきたいと思うし、取り組んでいきたいと思う。

7 閉会

進行：緑川

- ・ 御礼のことば（鈴木）
- ・ 諸連絡（緑川）

次回のブロック会議について（本事業のまとめ）

セミナーの持ち方等について（ワールドカフェ・参加者募集）

子育てサポートチーム養成研修について（参加者募集）

ホームページ掲載について

※ 解散

8 その他

福島民報社郡山本社、福島民友新聞社郡山総支社の取材対応。（吾妻）（記録：緑川）

